

2018年度しあわせ研究

クリエイティブからハッピーネスへ
～研究・教育・創作～

研究員 土屋 忍



始まりは拙編著『武蔵野文化を学ぶ人のために』（世界思想社、2014）に収録した拙稿であり、2015年度に開講した「日本文学文化研究調査実習」という授業であった。授業では、事前に黒井千次氏の許可を得た上で、武蔵野を描いた小説「たまらん坂」の精読を通じて映像化を試み、受講生たちは、クリエイティブな活動を通して文学への理解を深め、共同製作を経験した。

日本文学文化研究調査実習は、文学部の教員有志がそれぞれプロジェクト案を持ち寄り紹介し、説明会を通じてそれぞれ希望するプロジェクトに集った学生が中心になって自由に活動する形式の科目である。もともと文学部では、伝統的に学生の希望に応じて単位外の自主ゼミや研究プロジェクト、文学研修旅行（学外学修）などを複数実施してきたのだが、全学的に学外学修に注力することになったことを受けて、単位化（1単位）することとなった。科目の性格上、規定の授業時間数を大幅に超過することが前提になるが、今回のプロジェクトも同様で、さしあたっての区切りをつけるまでに4年かかった。

さて、このたびは、しあわせ研究所のご支援を賜り、映画として完成させることができた。そして、2回の関係者特別試写会を通じて、出演者、大学関係者、仏教関係者、映画関係者、テレビ局ディレクター、雑誌編集者、映画関係者、写真家、美術家、作家らから一定の評価を受けた。整音を行い、英語字幕を付けて、香港フィルマートのジャパンプース（文化庁・JETRO 主催）に出展し、世界各国 25 映画（祭）関係者からの問い合わせを受けた。その間、日本の劇場関係者からも関心が寄せられ、劇場公開のオファーもあったのだが、最終的には採算が取れないということで見送られた。その後、マルセイユ国際映画祭より招待状が届き、インターナショナルコンペティション部門に入選し、ワールドプレミア上映されることとなった。

故郷喪失者の故郷発見という観点から読み解いた論考を生かして映画を製作することにより、教員の研究成果を学生に教授することが可能となり、共同製作という行為そのものの教育効果も派生する。最終的に作品化することにより、成果の公表と活用の範囲が拡大し、大学や学会や国家という枠を越境し、幸福な循環がカタチとなる。

今後は国内各地での劇場公開を目指し、国内外の大学での上映会と講演会を開催し、数年後には授業などで活用する予定である。